

# 通俗小説における身を削ぐ孝心治療説話の構造

## The Structure of the Filial Piety Narration Cutting the Body in the Popular Novels

徳 永 彩 理\*

Sairi Tokunaga

### (要旨)

中国には、子が身を削いだ肉を薬として親に食べさせて治療する孝行説話がある。この治療は、親孝行のためにするとしても身体を傷つける行為は孝道に反する、という矛盾をもつがゆえに議論をよびながら、時代を経るごとに広がりを見せた。明清時代に発行された多くの通俗小説にも、この治療を取り上げるものが見られる。そうした通俗小説に見られる治療説話には、身を削がないでも助かったり、身を削ぐことを鬼神が諭したり、身を削いだ孝子を死なせまいとして鬼神がその命を救うなどの描写が見られる。これは、もし身を削いで子が死ねば、かえって親不孝になることを避けるためだと考えられる。しかしそれと同時に、ストーリー中には身を削ごうとする子の孝心に感動した鬼神によって、孝子や親が救われるという展開がみられるために、結果として身を削ぐ孝心治療を推奨する印象を読者に残す説話構造となっている。そのため、民衆はこうした治療説話を通して、身を削ぐ孝心治療を親孝行として肯定的に理解することとなった。

### 1 はじめに

中国には、親が病気になるると子が股肉などの自分の身体の一部を切り取り、薬や粥にまぜて食べさせて治すという説話がある。こうした説話では、親のために子が身を犠牲にして行なう感動的な孝行実践として治療が描かれている。しかし、経書に説かれる孝道では「身なるものは父母の遺体なり」(『礼記』祭義篇)といい、「敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」(『孝経』開宗明義章)と言われるように、親の遺体と見なされる身体は保持することが求められてきたのであり、この治療はこうした孝道に矛盾する行為である。そのため、この治療行為をめぐっては各時代を通

じて賛否両論が繰り返されてきた。最初に批判的な意見を唱えた代表的人物は唐代の韓愈であり、その論拠は主に身体を傷つけることに対する禁忌と、政府が表彰することで引き起こされる弊害であった。韓愈の後も賛否両論は並存しながら、清代になると学識者の多くが肯定意見をもつようになり、そうした賛同者の論拠は心の尊さであった。ところで、この治療の起源についてはこれまでの先行研究において、いくつかの説が挙げられているがまだ定説がみられない。史書に現れるのは『新唐書』の「孝友伝」からであり、後には元代になると禁令も出されるものの、その後も時代を経るごとに治療は益々広まりを見せながら、民国初期に至るまで止むことなく続

\* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

いた。さて、この治療説話はまた、通俗的読物を通して民間に普及したことが明らかになっており、明清時代に出版された通俗小説にも、この治療説話を取り上げたものが多数ある。そこで、筆者は小論において、できるだけ多くの通俗小説に見られる治療説話を収集し、それらに共通して見られる説話の構造を文学の観点から明らかにし、民衆がこうした治療説話を通して身を削ぐ治療を孝行として肯定的に理解した理由を考察した。その結果、通俗小説に描かれる治療説話では、身を削がないでも治癒したり、身を削ぐことを鬼神が諭したり、あるいは身を削ぐことを恥じる描写がみられた。こうした描写によって、作者は身を削ぐ行為を推奨しないように描く一方で、結末においては身を削ごうとする孝心に鬼神が感動して、孝子や親を救うというストーリー展開を持つことから、結果として身を削ぐ治療を肯定する印象を読者に与える構造となっている。そこで、次節ではまず身を削ぐ孝心治療に関する先行研究について批判を行ない、続く節においては小説に描かれる身を削ぐ孝心治療説話の実際の描写を示しながら、この説話が抱える上記の問題点について論じていく。

## 2 先行研究

先行研究は、史書や詩文集などに記述されたこの治療行為の是非についての議論の分析を中心テーマとして展開されている。それによれば、治療行為に反対する議論と賛成する議論とがある。前者はこの治療行為が儒教の教えに相反するだけでなく、この行為を表彰することで模倣が蔓延し、徭役逃れや名誉を得るための作爲的な身体毀傷が生じると主張する。後者は親のためを思う誠実な心に注目し、それを表彰することは社会を孝治に導く

手段であると考えていたことが明らかである。歴史的な研究によれば、こうした治療が行なわれたという記録は唐代あたりから盛んにみられるようになる。<sup>1</sup> この治療説話の起源には諸説があり、一般的には『本草拾遺』の「人肉治羸疾」が始まりといわれるが、それ以前にも古くから中国では人体の一部を薬材として用いる伝統があったことが分かっており、また印度仏教の伝来に伴って伝わった捨身供養説話の影響なども指摘されている。<sup>2</sup> 中国でこの説話が広く受容された背景には、国による孝道思想の推進があり、また通俗的読み物を通じて身を削ぐ治療説話が広まったことが明らかになっている。<sup>3</sup> 研究史上、最初にあげるべきは桑原隲藏である。桑原は史書を中心とした食人肉記録を理由別に分け、そのうちの医療のために行なう食人としてこの治療をとりあげ、治療が親孝行を動機としていたため、政府や民間に認知されて時代が下るごとに流行し、のちに弊害が多くなって禁令が出ても止まなかったことを報告している。<sup>4</sup> 桑原の研究によって、我々は身を削ぐ治療の歴史的な流れを的確に掴むことができる。ただ、中国人が人肉そのものに薬用効果を認めていたとの彼の認識<sup>5</sup> については、必ずしも当時の人々がそうとばかり考えていたとはいえない。それは、庶民の感性に連なる通俗小説の治療描写を見ていけば、治療の効果は鬼神の出現如何にかかっており、身を削がなくてもあるいは親が子の肉を食べなくても治癒することからも分かる。これについて、民間信仰にも目配りをして明解に述べているのが邱仲麟であり、「至誠与神鑑」という一節において、身を削いで病気が治癒するのは孝子の至誠心が神霊を感動させた結果であり人肉の薬効ではない、と当時の多くの人々が考えていたことを、明清時代の詩文集に見える文人達の言葉を例証として報告してい

る。<sup>6</sup> 邱は地方志や類書に大量に残る身を削ぐ孝心治療記録を中心に、治療が流行した原因を民間医療や信仰、国家政令などから多面的に考察している。邱はさらに、民間においては通俗的孝行読み物の他にも善書や靈感録などの宗教的な読み物に加え、小説も治療を伝播する媒体になったと述べており、その例として明代の短編小説集『型世言』や清代の長編小説『野叟曝言』に見られる身を削ぐ治療説話を取り上げている。ここは小論のテーマと共通する重要部分であるため、邱の論をもう少し詳しく紹介して小論との違いを明確にしておきたいと思う。筆者がここで不足と感じるのは、邱がこの治療説話のかかえる構造的な問題から、身を削ぐ治療に対して肯定的な印象を読者に与えていることを述べていない点である。邱は『型世言』では「対陳妙珍の孝心極予賛許。」<sup>7</sup>（訳：陳妙珍の孝心に対する極めつきの称賛）によって作者が孝の精神を宣揚していることと、当時の人々が観音信仰を背景にかつて身を削いで父を救った観音になぞらえて主人公を崇拜する描写を取り上げて肯定の論拠としている。そうした描写も身を削ぐ孝心治療を肯定的に捉える原因となったことは否定しない。しかし、身を削ぐ孝心治療説話では観音菩薩の他にも様々な鬼神が登場して主人公や親を救うストーリーが見られ、そこでの鬼神は身を削ぐ治療を支援する役割を果たしている。こうしたことから筆者は、肝を割いても主人公を死なせずに祖母ともども鬼神が救う、というこの治療説話の持つストーリー展開こそが、読者に治療を肯定的に理解させる原因となっていると考える。これは、筆者が調べた他の通俗小説に見られる治療説話にも共通する構造であり、小説の作者は身を削ぐ行為を推奨しないように描きながらも、子も親もみな救われるという筋運びによって、結果として読者にこ

の治療行為を肯定的に印象付けることになっている。また、邱がもう一例としてあげている『野叟曝言』については、水夫人が自身に対して身を削ぐ治療を行なった嫁や孫たちに対して、そのことを痛烈に批判して訓戒を述べるものの、「還是可以看出对割股孝忱的肯定。」<sup>8</sup>（訳：やはり股を割く孝の真心に対する肯定を見出すことができる。）と述べている。しかし、筆者はこの見解にも不足を感じる。それは、邱が股を割く孝の真心に対する肯定をこの小説において見出せる理由を明確に述べていない点にある。作者は水夫人に身を削ぐ行為を批判させるだけでなく、総括においても身を削ぐ治療行為は推奨しないと述べる。だが、ストーリーの結末では夫人と嫁や孫たちがみな救われて元気になる。読者は治療説話のこうした筋運びによって、この治療行為を肯定的に受け取るようになったと考えられるのである。既述のように、こうした治療説話の構造的な問題は他の通俗小説にみられる治療説話にも共通するものであり、次節ではこの問題について具体例を示しながら論じていく。

### 3 本論

#### 3-1 身を削がないでも助かる

『醒世姻縁伝』、『益智録』、『金鐘伝』、『蜀山剣俠伝』

明代の中央政府は身を削ぐ治療を表彰はしないが禁じもしない政策で対応したが、表彰しない中央政府に代わって地方官がそれを担うかたちで止むことなく続いていったという。<sup>9</sup> そうした地方政府の対応や人々の反応は、小説からもその当時の様子を窺うことができる。清代初期に、西周生によって著された『醒世姻縁伝』<sup>10</sup>（一百回）の第五十二回「名御史旌賢風世 悍奴婦怙恶乖倫」に姑を治療

した孝婦二名を県官が表彰坊を建立して盛大に表彰する場面がある。作者はこれを朝廷の勅命が下ったという設定にして通常よりも更に盛大な表彰場面を描写し、孝行治療の表彰が世の風紀を整えるために不可欠だと述べながら、同時にこの盛大な表彰行事を冷ややかに見る発言を登場人物らにさせている。

薛夫人道：「這人家蓋座牌坊，有甚好看？卻教帶了少女嫩婦的往人家去呢！蓋什麼牌坊，轟動得這們等的？」<sup>11</sup>（訳：薛夫人は「ひとの家に表彰坊が建ったからといって何でそんなに見に行くことがあるんです？少女や年頃の女の子らまで連れて人様の家に行かせようとするなんて。どんな表彰坊が建ったんです、こんなに大騒ぎして。」といった。）

さらに、この表彰式に、出席などしないと言い張る嫁を登場させる。

素姐説：「你兩個去，我是不去的。」薛夫人道：「你爹敬意教人來接咱，咱為甚麼不去？」素姐説：「這意思來混我麼！我伶俐多著哩！我也做不成那孝婦，我也看不了那牌坊；我就有肉，情知割給狗吃，我也做不成那股湯！精扯燥淡！」佯佯不理，走開去了。<sup>12</sup>（訳：素姐は「お二人はお行きになって下さい。私は参りません。」と言った。薛夫人は「お義父さまがお迎えにこられたのに行かないとはどうしてなんだい？」と聞くと、素姐は「この表彰を見に行かせて私に当てこすりをしようというんでしょう！私は賢いからすぐ分かりますよ！私はあんな孝婦になどなりませんし、表彰坊なんて見てられません。それに、もし私に肉があったら、犬に割いて食べさせると知っていて

も、股肉のスープなんて作れません！無駄話はおよしになって下さい！」と言うと取り合わないふりで行ってしまった。）

この嫁は狐の生まれ変わりで、薛家の息子である夫に殺されたという前世の因縁があるため、薛家の者には悉く反発する。ここで描かれるのは、身を削ぐ孝心治療の表彰行事を通じて親不孝な嫁を改心させることに失敗する薛家の様子である。作者の西周生が股肉を割く孝心治療を素姐に貶めて語らせているのは、彼女の親不孝で世間の常識を恐れないモンスターとしてのキャラクターを強調しようとしたためだけではなかったようだ。それは、第三十六回「沈節婦操心守志 晁孝子割股療親」において、庶子が嫡母に身を削ぐ治療をしようと土地廟に行くものの、途中で股を割く孝行を止めることになる場面でもわかる。

走到廟前開進門去，只見地下一折帖子，拾起來看，上面写道：「汝母不過十二日浮災，今晚三更出汗。孝子不必割股，反使母悲痛。」小和尚見了這帖，想道：「這個事是我自己心裡拳念，再沒有人知，如何有此帖在地？只怕是土地顯神，也不可。既說今夜三更出汗，不免再等這半日。」<sup>13</sup>（訳：廟の前に来て門を開けて入ったところ、書付が一枚落ちており、拾って見てみると「汝の母は十二日経たぬうちに災を過ぎ、今晚三更に汗が出る。かえって母を悲しませるから、孝子は股を割かずともよい。」と書いてあった。小和尚は書付を見て「この事は自分の心にしかなく、誰も知らないのにどうして書付にあるのだろうか？ひょっとして土地神が現れたのだろうか。今夜三更に汗が出るというから、もう半日待ってみよう。」と思った。）

そしてこの後、孝子はその通りにして身を削がずに帰宅して待つと、果たして嫡母は書付にあった通りに回復する。こうした結末には、孝子を傷つけることなしに救済しようとする作者の配慮が見られる。そのため、身を削ぐ治療を試みようとした孝子の孝心が土地神を感動させたので身を削がないでも救われたという理解を生むこととなり、結果的には身を削ぐ孝心治療を肯定するストーリーとなっている。また、西周生と同じ山東出身である解鑒が清代に書いた『益智録』<sup>14</sup>では、母を救おうとする息子が人の指の血でなければ治らないという道士に自分の指を差し出す。

道人曰「吾将割、子勿惧。」礼諾之。多時道人不割、疑之、睜目而視、道人已不知去向……<sup>15</sup>（訳：道士は「私が切るから、あなたは怖がらないように。」と言うと、礼は承諾した。ずいぶん経っても道士が切らないので、訝って目を開けてみると、道士は何処かへ行ってしまっていた。）

作者の解鑒は先の西周生と同じように孝子には身体を傷つけさせない。だがこの後、息子が泣く泣く帰宅すると元気になった母と再開できるという結末になっている。そのため、身を切られても母を治療したいと思う息子の孝心が鬼神を感動させたので救済された、と読み手に思わせることとなり、治療を孝行として推奨するストーリーとなっている。ほかにも、晩清に克明子が著した『金鐘伝』<sup>16</sup>（八卷六十四回）は孝道思想を強力に宣揚する小説であり、作品中に多く見られる注記や各章回末に付けられている評によって、作者は世を警醒しようとしている。全六十四回の章回

中、二編に身を削ぐ孝心治療が描かれ、どちらの話も血縁者ではない複雑な親子関係における治療を肯定的に描いている。その内、第六十回「義中孝上格天心 儒内仙往生佛国」では娘の賀淑媛が養父のために天地堂の前で身を割こうとすると、玉帝の勅旨でやってきた霊官が現れて孝心に免じて養父の延寿を約束され、娘は身を削がないでも養父を救うことができる。章回末の天香居士の評ではこの治療を次のように総括する。

賀淑媛欲捨身以報謝公之恩、不使父母作忘義之鬼、乃卒能全身以彰其義、義之尽、即孝之至也、孝之至者神自通、靈官之告、貞烈之封、亦似黃心齋之孝感天地<sup>17</sup>（訳：賀淑媛が身を捨てて謝公の恩に報いようとし、父母が義を忘れた亡霊にならぬよう、全身を保ったままその義を顕彰できたのは、義を尽くすことが、即ち孝が至るということであり、孝が至れば神に自ずと通じ、霊官がこれを天帝に告げ、天帝から貞烈によって恩賜されたのは、黄心齋の孝が天地を感動させたのと同じことである。）

作者は、深い義理の恩がある養父の病気に際し、養女が身を捨てても救おうとする至誠心は極限に至れば実の親子間に見られる至孝の精神と変らないものとなり、そうなれば鬼神はその孝心に感動して身を削がなくても救われるのだと述べる。だが、身を削ごうとした事による天からの恩賜というストーリー展開は、この治療を孝行として賛美することとなっている。さらに、民国に環珠楼主によって書かれた『蜀山劍俠伝』<sup>18</sup>（十卷三〇九回）では一卷第四十三回「大雪空山 割股療親行拙孝 衝霄健羽 碧崖丹潤拜真仙」に、娘が臂の肉を割いて父を治療しようとする神鳥

が現れて刀を奪い取り、怒った娘がそれを追いかけていくと白眉和尚のところへ導かれ、丹薬をもらって父は治るというストーリーが見られる。神鳥を追って行く途中でも娘は危険な場所に何度か身をさらす。作者は娘を散々危険な目に合わせながらも、身を傷つけることなしに父を救わせるという描き方を通して、身を捨てることを恐れないほどの強い孝心を宣揚している。

### 3-2 身を割くことは愚かだと論ず

『聊齋志異』、『揚州画舫録』、『野叟曝言』、『観音菩薩伝奇』、『観音得道』、『壺天録』、『八仙得道』

自分の小説で正しい孝道を世の中に教化しようとする作家は、身を削ぐ治療行為を描いても、それをただ扇情的に描くことは慎もうとする。そのため、作中で身を削ぐ場面を描く場合、それがよい事ではなく奨励しているのではないという言葉を挿入している。清代に蒲松齡によって著された短編志怪小説集『聊齋志異』<sup>19</sup> (十六卷) 卷五に「孝子」があり、母の腫瘍で悩む息子の夢枕に亡くなった父が現れ、身を削ぐ治療を勧めるのでやってみると治癒する。その末尾に次のような作者の総括がある。

異史氏曰：「割股為傷生之事，君子不貴。然愚夫婦何知傷生之為不孝哉？亦行其心之所不自己者而已。有斯人而知孝子之真，猶在天壤。司風教者，重務良多，無暇彰表，則闡幽明微，賴茲芻蕘。」<sup>20</sup> (訳：異史氏曰く「股を割くのは生を傷つける事で、君子は貴しとしない。しかし愚かな人たちに、生を傷つけることが、不孝だと分かりはしない。またその心を抑えきれずに行なったに過ぎない。こうした人があってこそ孝子の真心がなお天地に

あると分かる。風紀の教化を司る者は、重要な任務が多くて、表彰する暇が無いから、隠れた行いを明らかにするため、こうした卑しい身分の人を頼みとするのだ。)」

蒲松齡は、自分の作品で世間を教化することを念頭に置き、この治療が身を傷つける点では奨励できないが親孝行の精神は敬服に値すると述べてその孝心は支持している。これは、先に論じた身を削がないのに鬼神に救われるというストーリー展開が、この治療を肯定的に描くことになっているのと同様のパターンだと言えよう。つまり、作者は総括では身を削ぐ治療を奨励しないとことわりながら、作中では身を削ぐ治療を感動的に描いて宣揚する。また、清代に李斗によって書かれた筆記小説『揚州画舫録』<sup>21</sup> (十八卷) 卷三に蕭孝子が肝を割いて母を治療する一段がある。その叙述に先立ち、作者はこの治療を採録した動機を次のように述べている。

「人子割股割肝抉目以療親疾、是以親遺体行、殆非孝之経也。(中略) 蕭日曠之行孝、雖愚而情可憫、亦何忍概没之。爰因旧志所伝、録而存之。(中略) 以警世之愆視其親者。」<sup>22</sup> (訳：子が股や肝を割き眼を抉って親の治療をするのは、親の遺体で行なうが、恐らくは孝の道ではなからう。(中略) 蕭日曠の孝行実践は、愚かではあるが大変に気の毒であり、そのまま埋没させるには忍びない。そこで旧誌に伝わることを記録して残すことにし、(中略) 親を蔑ろにしている者への戒めとする。)

李斗は、身を削ぐことは立派ではなく愚かだ、と最初にことわり書きを入れている。そ

して、愚かな行為でありながらもその心情は価値があり、それを宣揚することによって親不孝をしている者に対する戒めにしようと考えており、作者は孝心を宣揚しても身を削ぐ事を奨励してはいない。しかし、作者の意図はそうであっても残された節婦の座化の場面では鬼神が至孝だと称賛することからも分かるように、結果として身を削ぐ孝心治療を孝行として賛美している。これと同じようなものに、やはり清代の作品で百一居士の著した筆記小説『壺天録』<sup>23</sup>（三巻）巻上にもいくつかの身を削ぐ治療記録が採録されており、作者は次のような総括を述べている。

「身体髮膚不敢毀傷此聖賢是学也、至於愚夫愚婦、一時急切迫而為割股之事、至孝所感、亦人情所難能者、（中略）欲救姑疾、不惜自割其肝、実為罕聞、事雖近誕、理実甚平、尽孝行之優者矣……」<sup>24</sup>  
 （訳：身体髮膚は傷つけてはならないというのは聖賢の教えである。知識や教養のない庶民にあっては、一時の危急に迫られて股を割くという事は至孝と感じる所で、また人情は得難い所である（中略）姑を救おうとして肝を惜しみなく削ぐとは、実に珍しく、事は浅はかだ出鱈目でも、理は実のところ甚だ平らかで、孝行を尽くした優れ者であろう。）

百一居士は、身を削ぐこと自体は愚かな行為と明言しており、けっして推奨しているのではない。採録した中の一例である肝を割く孝子についても「愚而孝也。」（訳：愚かでも孝である。）とのべており、採録した理由はあくまでも孝心の宣揚であり、身を削ぐ行為は愚かとしている。しかし、彼が取り上げた孝心治療説話では姑のために肝を割く孝婦が道士に救われ、ほかの数例でも母や継母がみ

なこの治療で治癒するという結末を見れば、この治療は孝行実践として肯定的に印象づけられている。また、先行研究のところでも取り上げたが、清代に夏敬渠が著した『野叟曝言』<sup>25</sup>（一百五十四回）第一百三十一回「八片香肱脾神大醒 三尺瑞雪心結齋開」は身を削ぐ孝心治療を中心テーマとして書かれた物語である。作者の夏敬渠は、身を削ぐ治療を「愚誠」や「愚孝」、「愚民」、「愚人」、「愚夫愚婦」の行為として水夫人に厳しく批判させ、身を削いだ者達はそれを聞いてみな己の行為を恥じる。それでも降雪の一件は「孝感動天」（訳：孝が天を感動させる）であるとしてなおも食い下がる秋香に対しても、水夫人は偶然に過ぎないとして厳然と退ける。さらに、作者の夏敬渠は章末で次のようにこの治療を総括し、自身のこの治療に対する立場がけっして推奨するところにはない事を明言している。

割股雖非正道、人子每踵為之、以為之者、時有奇效故也。無效而反致戕肢体、傷性命者不伝、愚者乃益踵為之矣。作者傷之、故以龍兒割臂奇效、開出水夫人正論以示人、允為千古不刊之論！」<sup>26</sup>（訳：股を割くのは正道ではないのに、人がしばしばこれを為すのは、時には不思議な効果があるからだ。効き目がなく身体を傷つけ生命を損なうなら伝わらない。愚か者はますますこれを為す。作者はこれを憂い、文龍が臂を割いた不思議な効き目をもって、水夫人の正論を展開して人々に示し、千古不刊の論として認めるのである！）

作品中ではまた水夫人の口を借りて、孝行の精神には節度というものがあり、親孝行のためならば何をしてもよいということにはならないとも言わせている。こうした描写か

ら、孝行実践は礼節を保って中庸であるべきで極端な行為は慎むべきである、と夏敬渠が考えていたことが分かる。ところで、既述のように邱仲麟はこの小説を引用して「還是可以看出对割股孝忱的肯定。」<sup>27</sup>（訳：やはり股を割く孝の真心に対する肯定を見出すことができる。）と述べているのだが、邱はこの小説が読者に肯定的印象を与えている理由は明確にしていない。これについては、筆者がこれまで述べてきたようにこの治療説話も他と同様、ストーリーの結末として水夫人と嫁や孫達が皆助かって幸福になるという筋運びとなっているために、推奨しないという作者の意図に反して読者に肯定的印象を与える構造となっていることは既述の通りである。ほかに、清末に無垢道人が書いた『八仙得道』<sup>28</sup>（一百回）第九十八回「白蛇歴劫成正果 孝子割臂遇神仙」では、臂を割いて父を治した息子に対して呂祖が「這等事情、在常人説来、称为愚孝、然無論如何、総是一片至忱之心、足回上天視聽。」<sup>29</sup>（訳：「こういうことは、普通は愚かな孝行と言われるが、いずれにせよ、至誠心によるのだから、天に奏上するのに足りるだろう。」）と述べる。作者は鬼神の口を借りて、孝子が身を傷つける行為は戒めながら、孝心に免じて支援するという筋運びによって、身を削ぐ孝心治療を宣揚している。また、清末から民国にかけて流伝していたといわれる章回話本小説『観音菩薩伝奇』<sup>30</sup>（四十回、原題は『観世音伝』）第三十八回「嚴居士建造白衣庵 劉賢婦割股療姑疾」と『観音得道』<sup>31</sup>（十八回）第十八回「賢媳婦割肉療姑 観世音踏鰲帰海」の二作は大変よく似た話であり、同じ劉氏という嫁が姑のために肝を割くと、老婆に化身して近づいた観音菩薩が嫁を称賛する。その時に観音はただ嫁を称賛するだけでなく、まずは身を削ぐ行為はよくないと諭す。

菩薩長歎道：「世上幾曾有人肉治得好病的？毀傷了父母之体去幹這勾當，也非常理。但是一片純孝之心，卻也不可及呢！況且婆媳之間，不比母女，人家詬厲百端的，也正多著。大嫂能夠如此孝順婆婆，真是萬分難得，真令人十分起敬！……」<sup>32</sup>（訳：菩薩は長い嘆息を言った。「世の中にどれだけ人肉で治った病気があったでしょう。父母の身体を傷つけてこんな事を仕出かすのは常識ではありません。でも純粋な孝心は及ばざるものがありますよ。おまけに嫁姑の間柄は母娘とは違い、人々はとかくあれこれと悪口を言うものです。あなたがこのように姑さんに孝行なのは全く得難いことで敬服させられます！）

観音菩薩は貧富や貴賤を問わず、求めれば必ず救ってくれる神様として宋代頃には既に民間では広く信仰されており、身を削ぐ孝心治療説話でも頻繁に姿を現して治療を支援することは先行研究でも言われている。<sup>33</sup>だが、小説に登場する観音菩薩は上記の例でも分かるように、身を削ぐことを奨励しているわけではない。しかし、こののち姑と孝婦が共に救われるという展開において、やはり治療が親孝行として宣揚されるという結果になっている。

ところで、宝巻にも観音菩薩がよく登場するが、宝巻の観音菩薩は身を割いた孝婦に対して諭したりなどはしない。例えば、光緒6年重刻の『十二円覚』では、観音菩薩が次のように孝婦を称賛して支援する。

観音大士被周氏孝心感動歎道「善哉、善哉、這等媳婦下界少有、恐怕他剖腹割肝傷了性命、吩咐護法韋馱可將救苦經一

卷附在周氏身上保他生命。』<sup>34</sup>（訳：観音大士は周氏の孝心に感動して歎息して述べた。「善きかな、善きかな、こんな嫁は下界には少ない、腹を切って肝を割いたから命が危ないかもしれぬ、護法を韋駄に言いつけて救苦経一巻を周氏に添えて彼女の命を守らせよう」）

この後、観音菩薩は姑の病の原因である五鬼を駆除し、老婆に化身して周氏に出家を勧める。ところが、これを悲観した舅姑が自殺しようとする、こんどは嫁が肝を割いて治療したことを紙に書いて舅姑に知らせ、嫁が修行に行く事を認めさせる。こうして宝巻に登場する観音菩薩は、どこまでも嫁の願いを適えるために支援し続ける。澤田瑞穂の研究でも明らかなように、宝巻はもともと仏教を宣布するための通俗的形式として利用されたもので、尼僧によって宣卷され聴衆も女性を中心であった。<sup>35</sup> 仏教思想では、女性の解脱成仏は不可能とされているが、宝巻では主人公に女性が多く、あらゆる艱難と迫害を超えて成仏できるというストーリー展開になっている。そうした苦難の一環として、姑や親のために身を削ぐ孝心治療が挿入されている。そこには親孝行のために身を削ぐことは至孝であり、鬼神が必ず助けてくれると語られる。宝巻は、散文と韻文を交互に配する独特な文体を持つが、散文では鬼神が姿を現して救済する様子が詳細に描かれ、韻文では鬼神や周囲の人々の賛嘆の言葉がテンポよく繰り返され、身を削ぐ孝心治療説話が全面的に賛美宣揚されている。<sup>36</sup> また、儒教では親不孝とされる死についても、不孝や罪悪として描かれてはならず、死んでから成仏したり転生して修行した後成仏したりするなど肯定的に描かれている。<sup>37</sup> それは、こうした宝巻のもつ宗教的性格と女性達に好まれる説話の在り方

として、そこに登場する観音菩薩はどこまでも嫁の味方をしてくれる神様として描かれ、正論であっても身を割いた嫁を非難するような言動は支持されなかったであろう。また、身を削いで死んだとしてもそれが不孝とされなかったのも、最終目的が現世の苦しみからの解脱と成仏におかれているために、賛美される事になったのだと考えられる。

### 3-3 孝子が自戒の言葉を述べる

『新鐫国朝名公神断詳刑公案』、『型世言』、『金鐘伝』、『恨海』

孝子や孝女が身を削ぐ治療をした事は、何時とはなしに周囲に漏れ伝わってしまう。そうした時、彼らは周囲に対して自分の身を削ぐ行為を恥じながら、ただ親の命を助けたい一心であったと述べる。例えば、明代の京南婦正寧静子が著した『新鐫国朝名公神断詳刑公案』<sup>38</sup>（四冊八巻）巻八「王県尹申請表孝婦」では、姑に身を削いだ孝婦が事実関係を調べようとする王県尹らに対して「此特医吾姑、豈有心以干名哉。」<sup>39</sup>（訳：これはただ姑を治療しただけで、名声を得ようとする心が有ろうはずがありません。）といて固辞する。これとほぼ同じ言葉を述べているのが、同じく明代に陸人龍によって編まれた短編小説集『型世言』<sup>40</sup>（八巻四十回）の第四回「寸心遠格神明 片肝頓蘇祖母」の孝女である。この小説は主人公の孝女陳妙珍の孝心を宣揚する物語として先行研究でも取り上げられている。<sup>41</sup> 祖母に身を削いだ孝女を周囲の者が県に申請して表彰してもらおうとすると「這不過是我一時要救祖母如此、豈是邀名。」<sup>42</sup>（訳：これはただ自分があの時、祖母を救うためにこうなったので名声を求めるものではありません。）といて固辞する。この言葉のあとに作者の注が「正気」（訳：まともな気持ち）とあり孝女の言葉を称賛している。彼らの言

葉からは、冷静な理性をもってすれば出来ようはずもない行為を、ただ親を救いたいという一念によって為した事に驚き、それが周囲に知られた事を恥じている様子が窺える。だが、その一念が鬼神に通じて皆助けられるという筋運びによって、身を削ぐ孝心治療を称賛しているのは、これまで見てきた小説の治療説話と同様である。また、先にも挙げた清代の克明子によって書かれた『金鐘伝』第二十二回「黄孝子割股医親 陶万一良言勸妹」の黄心齋も上記の孝女らと同様、親を救いたい一心であった心情を述べている。叔父たちに身を削いだことが分かってしまい、世間の議論は免れまいと言われると、「昨日無可奈何不得不如此、若說是孝、甥心絶無此想。(中略)謂甥不孝而已、甥又何惡其名呢、不孝就是不孝、我母親活着就好。」<sup>43</sup>(訳：昨日は致し方なくてこうするより他なかったのであり、もし孝と言えば私には決してそんな考えはありませんでした。(中略)私が不孝だと言われるまでの事で、私はまたその名をどうして恥じましょう、不孝は不孝で、母が生きてくれればそれでよいのです。)と述べている。その後継母は回復して、孝子は状元に及第し栄華を極めるという結末において、作者は身を削ぐ治療を孝行として宣揚することを通じて、作品執筆の動機である孝道による警世という思想を読者へ伝えることに成功したと言える。他に、清代の吳趸人によって書かれた『恨海』<sup>44</sup>(十回)第八回「論用情正言砭惡俗 婦大限慈母撤嬌娃」では、母を治療しようとする娘が次のように述べる。

「雖說身体髮膚，受于父母，不敢毀傷，然而我今日為母病起見，說不得犯一次不孝，以起母病。如果母親因此得愈，情愿再領此不孝之罪。」<sup>45</sup>(訳：「身体髮膚は父母より受けたもので傷つけることを敢え

てしないと言われるけれど、こうして今母の病気を見るにつけ、一度の不孝を犯すと言い出せず、母が病となった。もし母がこれで治れば、改めてこの不孝の罪を受けるつもりです。)」

作者は『孝経』の一節を引きながら、身を削ぐ行為は親不孝を覚悟したものだと娘に述べさせる。しかし、ここはそうした定めを犯しても尚、母を救いたいという強い孝心が宣揚されている場面であり、その後母は一時的に意識を取り戻すものの亡くなってしまう。すると娘は、身を削ぐ治療が効かなかったのは結局のところ「不過我心不誠罷了。」<sup>46</sup>(訳：自分の心が誠でなかったに過ぎない。)と想い至って泣き崩れる。こうした結末は、孝心さえ十分であればあるいは治療したであろうという余韻を読者に残すこととなり、誠実な孝心無くしては身を削ぐ治療は効果がないという理解を広めることとなった。

#### 4 まとめ

唐代に盛んになった身を削ぐ孝心治療は、その後の各時代を通じて、賛否両論を経ながらも基本的には孝行実践として支持されていった。それは孝思想が国の根本に置かれる世の中にあって、身を傷つける行為は愚かでも親孝行という動機の面からは無視できなかったからであった。この治療はまた通俗的な読み物を通じて民間に普及した。小論では通俗小説に見られる孝心治療説話を文学的観点から考察した。その結果、小説の作者は身を削ぐ行為を描く場合は慎重な描写を心がけて、身を削がないでも親を救える展開を考案したり、身を削ぐのは愚かな行為である事を登場人物や鬼神に述べさせたり、あるいは作者自身の注記などに明記している。これは、

もし治療によって命を落とせば親不孝になることを避けるための措置だと考えられる。しかし、それと同時にストーリーの結末では、身を削ごうとする孝心が鬼神を感動させて孝子や親が救われるという展開が見られることから、結果として身を削ぐ治療を肯定的に印

象づける説話構造となっている。通俗小説ではこうした身を削ぐ治療が鬼神にも通じる孝心であることを宣揚しながら、民衆に親孝行を教化したのであり、読者はこれらの説話を通じて身を削ぐ孝心治療を肯定的に受容したことと思われる。

〔注〕

- 1 桑原隲藏「支那人間に於ける食人肉の風習」、初出は大正13年3月、『東洋学報』、第14巻第1号（『桑原隲藏全集』第二巻、岩波書店、昭和43年）p.196。
- 2 村上嘉實「五十二病方の人部薬」（『新発見中国科学史資料の研究』 訳注篇、京都大学人文科学研究所、昭和60年）pp.167-223および金寶祥「和印度仏教寓言有関の两件唐代風俗」（『西北師範学院学報』、人文科学版、1958年第一期）pp.31-52。
- 3 邱仲麟『不孝之孝—隋唐以来割股療親現象の社会史考察』（国立台湾大学歴史学研究所博士学位論文、1997年）pp.49-50。また任命玉は孝行故事が通俗小説に与えた影響として、身を削いで孝心治療する説話が明清時代の小説に多く見られることを指摘し、巻末資料として通俗小説中の孝および不孝説話一覽を挙げている。任命玉『中国孝行故事研究』（中国文化大学中国文学研究所博士学位論文、1999年）。
- 4 桑原隲藏、前掲書、p.196。
- 5 「我が輩は人肉が医薬として、しかく有効のものであるや否やを審にせぬが、支那人の記録によると、余程効能あるようである。」桑原隲藏、前掲書、p.197。
- 6 「可見有相当多的人認為割股療疾得癒、其实是真誠感動神靈的結果、並非人肉的藥効。」（訳：相当多くのひとが、股を割く治療が効くのは、じつのところまごころが神靈を感動させた結果であり、けっして人肉の薬効と考えていたわけではなかった。）前掲論文、pp.105-107。一部には人肉そのものの薬効を信じる人がなかったわけではないことを邱仲麟も認めているが、いずれにせよ至誠心がなければ効果がない。
- 7 邱仲麟、前掲論文、p.49。
- 8 邱仲麟、前掲論文、p.50。
- 9 桑原は「明時代にも、清時代にも、すべて元時代と同様に、割股孝行に対しては、旌表を加えぬ原則となっている。」と述べている。桑

- 原隲藏「支那の孝道殊に法律上より観たる支那の孝道」、初出は昭和3年2月、『狩野教授還暦記念支那学論叢』（『桑原隲藏全集』第三巻、岩波書店、昭和43年）p.61。また邱仲麟も次のように報告している。「然而在中央政令不旌表的情况下、地方官提報的情况仍然很多。（中略）地方官在不便上請的情况下、多半自行予以奨励、其例子不勝枚举。」（訳：しかしながら、中央の政令で表彰しない状況にあっても、地方官が報告する状況はいぜんとして多かった。（中略）地方官は申請をはばかれる状況下において、大半がみずから奨励を行なうという例は枚挙にいとまがない。）邱仲麟、前掲論文、p.146。
- 10 [清]西周生撰『醒世姻縁伝(中)』（黄肅秋校注、上海古籍出版社、1983年）。
- 11 西周生、前掲書、p.762。
- 12 西周生、前掲書、p.762。
- 13 西周生、前掲書、p.537。
- 14 [清]解鑒『益智録』（王恒柱等校点、人民文学出版社、1999年）pp.236-237。
- 15 解鑒、前掲書、p.237。
- 16 [清]克明子著『金鐘伝』（王以昭主編『罕本中国通俗小説叢刊』第二輯、天一出版社、民国63年）。
- 17 克明子、前掲書、p.172。
- 18 [民]環珠楼主『蜀山劍俠伝』第三冊（葉洪生校点『近代中国武俠小説名著大系』、聯経出版、中華民國73年）。
- 19 [清]蒲松齡『聊齋志異』（齊魯書社、1981年）。
- 20 蒲松齡、前掲書、p.322。
- 21 [清]李斗撰『揚州画舫録』（汪北平等校点『清代史料筆記叢刊』、中華書局、1960年）。
- 22 李斗、前掲書、p.72。
- 23 [清]百一居士『壺天録』（『筆記小説大観』正編、第五冊）。
- 24 百一居士、前掲書、p.3021。
- 25 [清]夏敬渠『野叟曝言』（『中國通俗小説名著』、第1集 第22冊-第23冊、世界書局、1962年）。
- 26 夏敬渠、前掲書、p.2075。

- 27 邱仲麟、前掲論文、p.50
- 28 [清]無垢道人『八仙得道』（卜維義等校点、春風文芸出版社、1987年）。
- 29 無垢道人、前掲書、p.779。
- 30 [清]曼荼羅室主人『觀音菩薩傳奇』（中国曲芸出版社、1990年）。
- 31 [民国]江村『觀音得道』（『觀音菩薩全書』張穎校点、春風文芸出版社、1987年）。
- 32 曼荼羅室主人、前掲書、pp.187-188。
- 33 于君方「宝卷文学中的觀音与民間信仰」（『民間信仰与中国文化國際研討会論文集』林如主編、漢学研究中心、1994年）。
- 34 『十二円覚』（張希舜等主編『宝卷』初集26、山西人民出版社）。
- 35 澤田瑞穂『宝卷の研究』（図書刊行会、昭和50年）pp.60 - 66。
- 36 拙著「宝卷による「割股療親」孝行の推進について」（『アジアの歴史と文化』第十二輯、山口大学アジア歴史文化研究会、平成20年）pp.89-110。
- 37 澤田瑞穂、前掲書、p.66。
- 38 [明]京南婦正寧靜子『新鑄国朝名公神断詳刑公案』（古本小説集成編集委員会編、『古本小説集成』上海古籍出版社）。
- 39 京南婦正寧靜子、前掲書、p.349。
- 40 [明]陸人龍編『型世言』（賈君点校、中華書局、1993年）。
- 41 邱仲麟、前掲論文、p.49および吳燕娜「礼教、情感、和宗教之互動：分析比較『型世言』第四回和「麗水陳孝女伝碑」对割股療親的呈現」（『文与哲』、第12期、国立中山大学中国文学系、2008年）。
- 42 陸人龍、前掲書、p.58。
- 43 克明子、前掲書、p.52。
- 44 [清]吳趸人『恨海』（豫章書社、1981年）。
- 45 吳趸人、前掲書、p.59。
- 46 吳趸人、前掲書、p.61。

## 〔参考文献〕

- 1) 桑原隲藏「支那人間に於ける食人肉の風習」、初出は1924年3月、『東洋学報』、第14卷第1号（『桑原隲藏全集』第二卷、岩波書店、1968年）。
- 2) 桑原隲藏「支那の孝道殊に法律上より觀たる支那の孝道」、初出は1928年2月、『狩野教授還曆記念支那学論叢』（『桑原隲藏全集』第三卷、岩波書店、1968年）。
- 3) 金寶祥「和印度仏教寓言有関的兩件唐代風俗」（『西北師範学院学報』、人文科学版、第一期、1958年）。
- 4) 澤田瑞穂『宝卷の研究』（図書刊行会、1975年）。
- 5) 村上嘉實「五十二病方の人部薬」（『新發現中国科学史資料の研究』 訳注篇、京都大学人文科学研究所、1985年）。
- 6) 于君方「宝卷文学中的觀音与民間信仰」（『民間信仰与中国文化國際研討会論文集』林如主編、漢学研究中心、1994年）。
- 7) 小林義広「宋代の割股の風習と士大夫」（『名古屋大学東洋史研究報告』名古屋大学東洋史研究会、1995年）。
- 8) 下見隆雄『孝と母性のメカニズム－中国女性史の視座－』（研文出版社、1997年）。
- 9) 邱仲麟『不孝之孝－隋唐以来割股療親現象的社会史考察』（国立台湾大学歴史学研究所博士学位論文、1997年）。
- 10) 任命玉『中国孝行故事研究』（中国文化大学中国文学研究所博士学位論文、1999年）。
- 11) 梁音「清代の孝子説話資料」『素行録』解題一「王武士妻」孝行説話における「食人肉」行為をめぐって」（『名古屋大学中国哲学論集2』名古屋大学中国哲学研究会、2003年）。
- 12) 吳燕娜「礼教、情感、和宗教之互動：分析比較『型世言』第四回和「麗水陳孝女伝碑」对割股療親的呈現」（『文与哲』、第12期、国立中山大学中国文学系、2008年）。